

黙示録アリス

鏡 貴也



ファンタジア文庫

2091

□絵・本文イラスト 加藤勇樹 (アークシステムワークス)

目次

世界を終わらせる少女の病 ^{やまい}	5
第一章 性格の悪い転校生	11
第二章 少女を殺すための授業	69
第三章 迷宮ダイブ	148
第四章 最後の四分間の物語について	231
エピローグ——そもそも世界を救うとは？	304
あとがき	314

世界を終わらせる少女の病^{やまい}

かつての僕の世界はとても平和だった。

妹がああ《奇病^{きびょう}》にかかるまでは、とてもとても平和だった。

「私将来、お兄ちゃんのお嫁さんになるね！」

妹は毎日、そんなふうにはしゃいでは眩^{まぶ}しいほどの笑顔^{えがお}を僕に見せた。
だが妹は発病してしまった。

それはとある研究^{けんきゅう}所。

とある治療^{ちりょう}施設^{せつし}。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん」

妹が言う。

「お兄ちゃん……私お兄ちゃんが、大好き」

妹はニコニコ笑っている。

笑っているのに体はガタガタ震^{ふる}えている。

ニコニコ、ガタガタ。

ニコニコ、ガタガタ。

涙が流れている。

涙の色が右目は赤い。

左目は青い。

左右の瞳の色まで、青と赤だ。

「真之介！ 妹は……咲はもうだめだ！ 殺せっ！」

背後で大人たちが叫んだ。

僕は動けない。

僕は動けない。

右手にナイフを握っているが、妹の柔らかい肉に突き立てることはできない。

だって、あたりまえだろう？ 彼女はたった一人の妹なんだ。

「真之介！ 頼む！ 迷宮病だ！ それを放置したら、この区画に住む数十万の人間が全

員死んでしま……」

声はそこまで。

死んだのだ。

妹が発病した病気に触れて、死んだのだ。

声の主は、おそらく叔父だ。病気の研究をしていた、叔父。だが叔父は死んだ。

妹が殺した。

他にも、妹を殺処分しようとしていた学園魔術師たちも皆殺しになった。

妹の足下に、迷宮が広がる。

彼女の病気は、周囲に突如《迷宮》を生み出し、世界を塗り替えてしまうという、異様な病気だった。

その、迷宮が世界に広がっていく。

迷宮の中にはなにか、正体不明の力やモノが蠢いていて、人間たちを、消す。僕を除い

たすべての人間を迷宮で塗り潰し、消滅させてしまう。

妹が少し悲しげな顔で言った。

「……僕も、殺すのか？」

「対処が遅いから……もうその数十万人は、死んじやったよ、お兄ちゃん」

「……僕も、殺すのか？」

妹は頭を振った。

「お兄ちゃんは大好きだから、いまなら逃がせる。でも、それもと一分くらいかな。私

が私でいられるのは、残り一分。だから、さよならだね、お兄ちゃん」

タイムリミットは、一分。

「嫌だ。一緒に逃げよう」

「あはは、どこへ？ 無理だよ。病気が繁殖してるのは私の中なんだから。残り四十秒。四十秒。」

「咲！」

「さよならお兄ちゃん。大好き」

「僕は絶対、おまえを助け……」

「無理しないで。私はもう、だめ。いなくなつたと思つ……」

「嫌だ！ 絶対におまえを、助ける！」

僕は手を伸ばす。

必死に手を伸ばす。

妹の腕をつかむ。

妹が驚いたように目を見開く。

左右の、色が変わつてしまつた腫がきらめく。

「さ、触らないで！ 病気が……病気がお兄ちゃんに感染……」

「うるさい！ 関係ない！ 僕はお兄ちゃんだぞ！ おまえを守るように言われてるん

だ！ 絶対に、おまえを助け……」

だがそこで、妹の中にあつた病気が僕の腕に侵入してくるのを感じた。右腕が急激に重く、だるくなつていく。

「やめて！」

妹が金切り声をあげて、僕の腕を払つた。僕は吹っ飛んだ。頭から着地してしまい、あまりの衝撃に動けなくなつた。

妹が不安げな顔で言う。

「……ああ……ああ、どうしよう。少し感染つちやつた。私の、頭の中の黙示録が、少し。でももうタイムリミット。これ以上は私でいられない。バイバイ、お兄ちゃん」

手を振る。彼女の足下が病気に感染し、どんどん迷宮化していく。

僕は叫ぶ。

「ふざけるな！ 絶対に……僕は絶対におまえを救うぞ！」

だが妹は闇の中へ。

迷宮の中へと消えてしまつた。

そして僕だけが生き残つた。

その区画に住んでいた数十万人は、病気の発病に巻き込まれて死んだ。

これが《迷宮病》だ。

最悪の病気。

少女だけがかかる、謎の奇病。

そして僕らは——少女を殺して、世界を救う。

第一章 性格の悪い転校生

妹がいなくなってから、十年の時が過ぎた。

僕はもう十七歳になっていた。

高校生の、夏。

教室。

照りつける日差し。

ベランダから見える、どこにでもよくある校庭の風景。

夏服を着た一般科学生の少年少女たちが楽しそうに笑いあっている。

その平和そうな姿に、

「……クズどもが、クズな顔して生きてるなあ」

僕はほんの少し皮肉げに口元をつりあげ、へらへらと半眼で呟いた。
すると横から声をかけられる。

「クズって誰のこと？」

女の声。

「しっかし、大人しそうな見た目とは裏腹に君、とても口が悪いんだねえ」

僕は声のほうへと目を向ける。

すると隣には見知らぬ少女が立っている。

セーラー服姿の少女。長い茜色の髪に、白い肌。黒目がちな大きな瞳。喉に汗が伝っている。

「誰？」

僕が聞くと、彼女は答える。

「名前ってこと？ それともナンパ？」

自分から声をかけてきたくせに、彼女はそんなふうに出て、笑う。

ちなみに僕がいるのは東京にある『都立吉祥寺高校』の教室のペランダだった。転入面接試験を受けるために、ここにいる。

教室にはいま、十五人ほどの男女が待機しており、名前を呼ばれるのを待っているはずだった。

僕は教室のほうを見て、まだ十人以上が残っているのを確認してから、聞く。

「もう、僕の名前が呼ばれたのかな？」

彼女は笑う。

「君の名前も知らないのに、なんで君が呼ばれたかどうかが私にわかるのよ」

「ならなんで、君は教室を出てきた？ ここは暑いだろう」

「クーラーが苦手だね」

「ふうん」

「それから馴れ合うのも苦手」

彼女は教室をつまらなそうに見つめる。教室には、緊張した面持ちで背筋を伸ばしている生徒たちがいる。

「どうせあの中、数人しか学校には入れないし。それに、入ってからここじゃ何人も死ぬでしょう？」

と、彼女はふいに言った。

何人も、死ぬ。

そう。

ここはそういう学校だ。

だが僕は笑って、言う。

「で、僕に話しかけるのは馴れ合いにならないのかな？」

「うんと、だからたぶんこれは憐れみかな？」

「あ？」

「あなた友達いなそうだし。だから話しかけてあげたの」

クソみたいに余計なお世話だ。

僕はあきれたように彼女を見つめて言う。

「なるほどね。僕の友達の数にはさておき、少なくとも君みたいな女とは友達になる自信がないよ」

「あはは。やっぱり大人しそうに見えて君、とても気が強いよね」

「君ほどじゃない」

「あは」

笑って、彼女はこちらに手を差し出してくる。

「私は氣流^{きりゅう}キリ。もしここに入学できたなら、よろしく」

僕はその、握手^{あしゆ}を要求してくる傲慢^{ごうまん}な細い手を半眼で見下ろし、それから再び校庭へと目を向ける。ポケットから右耳専用のヘッドフォンを取り出し、装着する。

「ちよつと、無視しないでよ。そんなんじゃ友達できないぞ？」

うるせえよ、と思うが、僕はもう返事をしない。ヘッドフォンから音楽を流す。流れ出す音が脳幹^{しげき}を強く刺激する。

キリは相変わらずあははと笑っている。変な女だ。

とそこで、教室からかすかに声がする。

「……之介。有栖真之介^{ありすしんのすけ}はいないのか？」

誰も返事をしない。当然だ。有栖真之介というのは、僕の名前なのだから。

キリが横で興味深げに笑う。

「あゝ、君の名前、わかっちゃった、真之介君」

「……………」

「先生が呼んでるよ。いかないと、入学できないかも。それともヘッドフォンの音がうるさくて、私の声も聞こえない？」

僕は答えた。

「左耳はあいてるよ」

僕はペランダの手すりから背中を外し、教室の窓を開く。こちらを見て、教師が言う。

「おまえが有栖真之介か？」

「そう」

「転入面接をする。こい」

僕はうなずいて、教室を出た。

背後でキリの声をした。

「頑張^{がば}ってねえ。あとでまた、会えるといいね」

まったく興味を持たない。

僕は無視して、教室の扉^{かど}を閉めた。



面接会場とは名ばかりの、普通^{ふつう}の教室。

面接官は四人。

二十代前半くらいの男女。

四人とも机に座り、書類らしきものになにやらペンを走らせている。その中の一人の女が僕に聞いた。

「君の名前は有栖真之介。十七歳。三軒茶屋高校からの転入。これで間違^{まちが}いはない？」

「ええ」

僕はうなずく。

半眼でへらへら笑う。

現に僕はいま、三軒茶屋高校の制服を着ている。

「中学時代は海外にいたってあるけど——これはなにをしていたの？」

「ごく普通の中学生、ですかね」

「はは、ごく普通の中学生がこの学校に入るわけないと思うけど」

「そうですか」

「ここは死ぬ可能性のある学校よ？」

「知ってます」

「生徒たちは命を張って頑張^{がば}って、ここで病気の少女を殺して世界を救う」

「ええ」

「じゃあ、この学校を志望した動機は、世界を救いたかったから？」

僕はその問いに、首を振った。

「いいえ」

「愛国心から？」

「違います」

「じゃあ、なに？」

「純粋^{じゆんすい}に金です。この学校は、実力次第^{じりきだい}で金が支給されるから。世界とか、正直どうでも

いいです」

「……………」

「あ、それとも今回は熱血タイプが欲しいとか？ それならそう演じてもいいですよ？ ああ、なんだか僕、とつても世界が救いたいなあ」

棒読み気味に僕が言うのと、女教師は嫌そうに手を振る。

「そういうのいらないから。正直に答えて」

「じゃあ金。名譽。権力。他には興味ありません」

教師たちがひそひそ話し合う。書類にペンを走らせる。『ひどく性格が悪い奴がきた』
とでも書いているのだろうか。もしくは、『正直者で大変よろしい』とか？

まあ、僕にとっては全部、どうでもいいことだけだ。

女教師が言った。

「じゃ、実力審査をするから」

「ここですか？」

「そう。今回学校で出た欠員は四名。受験してきたのは七百二十名。だからほとんどが落ちる。君みたいな不純な動機しかない、金だけが目当ての生徒なんかは、特にね」

「へえ。それは困ったな」

僕はへらへら笑った。

女教師が言う。

「じゃ、やるから。佐久間先生」

呼ばれた男性教師が、立ち上がる。

その間に、僕は右手の指をパチンパチンパチンと三回鳴らす。それが僕が右耳に装着している《脳内魔導起機》の起動合図だ。

ヘッドフォンから爆音が流れ出す。

リズム。

ビート。

メロディ。

それに乗って呪い歌が僕の脳幹を激しく揺さぶる。

呪いが記憶領域をダブダブに満たし、脳内メモリが千切れんばかりにブーストして魔法を使う準備が完了する。

佐久間先生とやらも、耳にヘッドフォンをつけている。先生の右手に紫色の炎が灯る。

《脳内魔導起機》で呼び出した魔法だ。

さすが先生。

それなりに起動が速い。

まあ、それはあくまでそれなりだけど。

佐久間先生がにやりと笑って言った。

「この学校じゃ、面接でも死人が出ることもある」

「そうですか」

「おまえ死ぬかもな。さっきからなめた態度でへらへら笑いやがって、むかついてんだ」

「はあ。それはすみません」

「じゃ、やるか」

「どうぞ。先生からきてください」

言いながら、僕はリズムをとるように――まるで指揮棒を振るかのように、右手の指を宙空に踊らす。すると立体的な光が宙を泳ぐ。その光で、僕は《脳内魔導起機》を操作していく。

《脳内魔導起機》の中には自分で取捨選択した六種類の魔法歌を入れることができる。その中の一つを、僕は選択、高速起動する。

その、僕の指の動きを見て、女教師が叫んだ。

「佐久間先生、気をつけて！ この子、難度の高い《瞬節迷宮》から持ち帰った魔法技術

を使っ……」

だが、もう遅かった。

すでに僕の脳漿は魔法の歌でダブダブだ。

脳内では呪い唄がヘッドフォンから再生され続けている。繰り返し繰り返し、丁寧に呪いが歌いあげられていく。

【一瞬♪ 刹那♪ 刹那の時間♪

時間の刹那が一瞬の刹那♪ 一瞬♪ 刹那――】

僕は眩く。

「……加速スイッチ――」

かちんと、体にスイッチが入る。魔法が発動したのだ。肉体が加速していくのがわかる。加速できるのはほんの一秒だけ。でも十分だ。僕は床を蹴る。一瞬刹那で僕は佐久間先生の目の前に達する。制服の内ポケットから出したナイフを佐久間先生の首筋にそえる。殺してもいいが、しかし、

「あれ、教師を殺しちゃった場合の免責書類って、僕かわしてましたっけ？」

佐久間先生がこちらをにらむ。

「てめえ……」

僕は無視してくるつとナイフを引く。ナイフを隠す。さらに一歩下がって聞く。
「ああ、あと、この学校は刃物の持ち込みは……」

すると女教師が言った。

「自分の武器として必要、と、きちんと申請すれば……」

「問題ない？」

「ええ」

「じゃ、入学できるようならさっそく申請します」

という言葉に、女教師が言った。

「なに言ってるんの。面接官を圧倒できるような人材を、うちが逃すわけじゃない」

僕は女教師を半眼で見て、言った。

「つまり？」

「あなたは合格よ。ようこそ、『都立吉祥寺高校』へ。私たちと一緒に、世界を救いましょう」
女教師が手を広げ、そう言う。

——一緒に世界を救いましょう。



僕はその、入学できたことの喜びについて、こう答えた。
 「あの、さっきも言いましたが……世界とかまるで興味ないんで勘弁^{かんべん}してください。正直暑苦しいですよ」



面接教室を出ると、次の面接者が僕のほうを見て馴れ馴れしく言ってきた。

「お、また会ったね、真之介君。面接どうだった？」

さっき声をかけてきた、気流キリだ。

僕はキリを見て、答える。

「別に。普通^{ふつう}」

「受かった？」

「たぶんね」

「やっぱり君、優秀^{ゆうしゅう}だったんだ」

「どこを見てやっぱりって思ったんだっけ？」

「あほみたいにすかしてるところ」

「あはは、言うなあ」

僕は皮肉げにへらへら笑う。

「で、そんな君は優秀なの？」

キリは胸をぐいっと反らして、答える。

「そりゃー、この美貌^{ひびよう}で優秀じゃなかったら、見た目だけ女になっちゃうでしょう？」

僕はキリの顔を見る。確かにちよつと見た目は整っているかもしれない。美人と呼ばれるだろう。それに体は細く、しかも胸が大きい。

僕はそのふくらんだ胸を半眼で見つめ、

「……ああ、胸が大きい女の脳ミソはなんとやら、つて奴かな？」

「あは、調子に乗つてると殺しちゃうぞ、すかし野郎君^{やろう}」

「は、やってみろよ胸だけ女ちゃん」

僕は指をパチンパチンパチンと鳴らす。《^{ヘッドフォンファズ}脳内魔導起機》を起動する。

同時にキリも指を鳴らしている。ポケットから小さなヘッドフォンを取り出している。

その動きだけで、キリがさっきの佐久間先生よりも強いことが、わかる。僕より強いかどうかはまあ、別の話だけれど。

キリがにやりと笑って、言った。

「なんてね。冗談はさておき、じゃ、またあとでね、真之介君」
扉を開く。

「気流キリです。面接、よろしくお願いします」

教室に消える。

やはり妙な女だ。めんどそうなので二度と会いたくない。面接で落ちろ。

僕はヘッドフォンの音を止める。ため息をつく。踵を返して廊下を進む。

廊下には誰もいない。

この学校は《一般高校科》と《迷宮病少女殺害科》で分かれていて、ここは日常的に死に出る《少女殺害科》のほうの校舎だった。

僕は校舎を出る。

相変わらず日差しは目が回りそうなほどに強い。

校庭では男女の楽しげな声がする。

校庭は両科共有なので、平和そうな少年少女たちが青春を謳歌して笑いあっている。

「……はは、青春謳歌、馬鹿かってね」

まるで呪い歌を歌うかのように、僕は韻を踏んで呟いてみる。自分の言葉のあまりのつまらなさに乾いた笑い声を漏らす。

僕にはなぜ彼らがこんなにも無邪気に、無条件に、脳みそを使わず笑っていられるのかわからない。どうやら僕は、妹が《迷宮病》を発病して消えてから、正しい笑い方を忘れてしまったようだった。

でも、少なくとも笑えなくなってしまったのは僕だけじゃないはずだ。

なぜなら《迷宮病》という異様で奇妙な病気は、僕から笑うことを奪う以外にも世界に劇的な変化をもたらしたのだから。

病気の定義は、こう。

《迷宮病》

- ・ 十八歳までの少女だけがかかる奇病。
- ・ 発病した少女は、自分を中心とした周囲に異次元迷宮を生み出す。
- ・ 迷宮の規模、構造、構成は様々。閉鎖された学校のような形や、廃病院のような形、巨大な一戸建て、ゲームのような平原など、どうやら少女の過去のパーソナリティが影響していると思われる。
- ・ 最低半径二キロから、数百キロにまで達することがある。
- ・ 迷宮に覆われてしまった区画は、迷宮が現実世界に固着する《永久迷宮》化を起す前に、中心にいる少女を殺さなければ二度と元には戻らない。

これらすべてが、たった十年ちよつと前に始まった出来事だった。もちろん世界は大混乱。

病氣に対処できなかった国は、ほとんどの国土を《永久迷宮》化されてしまい、消えた。おそらくいまでは、世界の四分の一の大地が迷宮となつてしまっているはずだ。特に軍事技術が進んでいない後進国がひどかった。

アフリカなどはほぼすべての地域が迷宮化。

オーストラリアや、中国の山間部も、もう迷宮しかないはずだ。

アメリカや、ヨーロッパ、日本といった先進国も、大都市のいくつかを失った。

だがそれでも、人類はしぶとく生き残った。

それどころか迷宮に侵入し、内部から現代科学とはまったく違う新しい技術を持ち帰ってきて、さらなる繁栄を遂げてしまった。

その新しい技術が、

「……魔法」

僕は平和な校庭の中央で、パチンとまた、指を鳴らす。

迷宮から人類が手に入れたのは、迷宮帰還品流用魔法と呼ばれる技術だった。

人間の脳内に暗号化された音振を浴びせ、脳内の異界領域にアクセスして無から有を生み出してしまふ——などという説明がなされている新しい技術。

僕は右耳につけた、《脳内魔導起機》をぼんぼんとたたく。

右につけると主に左脳に、左につけると主に右脳に魔法は響くのだという。僕は左の脳を揺さぶるのが好みだった。言語を操って魔法を起動するのが好きだった。

校庭を出ると、通りに一台のバイクが停まっているのが見えた。

バイクには、この《都立吉祥寺高校》のセラー服の上に、白衣を羽織っている、という、奇妙な姿の少女が乗っていてこちらを見ていた。

「お兄様……面接はどうでした？」

少女が言う。

だが、彼女は僕の妹というわけじゃない。従姉妹だ。

早苗弥生。

十五歳。

《都立吉祥寺高校》一年生。

迷宮病の研究をしていた叔父^{おじ}の、娘^{むすめ}。
僕の妹の発病に巻き込まれて死んだ叔父の、娘。
僕は言う。

「迎えはいらないって言ったはずだけど」

「でもお兄様はまだ、このへんの土地勘^{とちかん}がないですから」

「そんなはずないだろ。僕は吉祥寺の生まれだよ」

「八歳までの話じゃないですか。妹の咲^{さき}が死^しんでから、お兄様はすぐに研究所を……家を出てしまわれました」

僕は弥生を半眼で見つめ、道を歩き出す。

弥生が慌^{あわ}ててバイクを降り、押しながら歩道に入^いってこちらに近づいてくる。彼女は小柄^{こがら}なので750ccのバイクがかなり大きく見える。

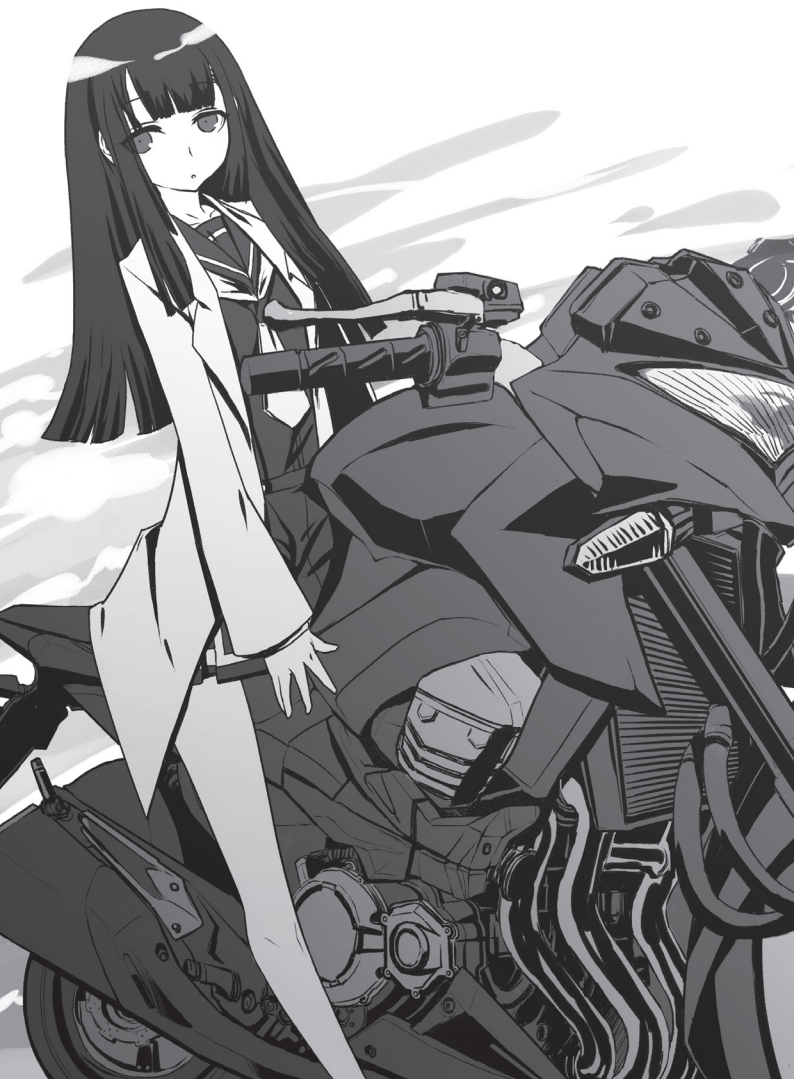
「なんで私に背を向けるのですか？ 乗^のってください」

「だって迎えにきてくれなんて言^いってないし」

「そんな」

「それに弥生、君にちょっと言^いっておくけどね」

「え、あ、はい」



僕はへらへら微笑みながら、弥生に言った。

「僕の中では妹は死んでない。救出する対象だ。だから……あんまりふざけたこと吐かすんじゃないよ、おまえ。殺すぞ」

「あ……」

弥生が驚いたように目を開ける。しまった、というような声をあげる。しかし僕は無視して歩き出す。

「じゃ、そういうことだから。もう声かけないでね」

「……あ、あの、ごめんなさい。そういう意味じゃないんです」

弥生が、バイクを必死に押しながら並んでくる。僕はとてもいじわるなので、歩調を緩めてやらない。

彼女は息がきれて胸を上下させながら、ふーふー言っている。

「し、失言でした。私も、咲を救う研究については最大限協力させてもらおうと思ってます。お兄様が、咲を救うために《都立吉祥寺高校》に潜入しようとしている、というのはわかっています」

僕は半眼で彼女を見下ろし、へらへら笑う。

「はは、わかってるから、なんだよ。研究所の奴らは全員、七歳の僕を笑っただろう？」

《永久迷宮》化した少女は決して救えない。妹を助けたいだなんて、ガキの戯言だ——だけ？」

「私の言葉じゃありません。それにその当時は私もまだ六歳です。大人たちのやりとりの記憶はありません」

「でも研究所の方針はそうだ。国家の方針も」

「ですが私の方針は——少なくとも私が管理している研究室の方針は違います」

僕は弥生のほうをもう一度、見る。

セーラー服に白衣をまとった姿。

彼女はたった十五歳にして、迷宮病についての研究で有名な太閤製薬の研究室の一つを任されている天才だった。

父親も母親も太閤製薬の研究者で、彼女も研究者。

といつても、一度発病してしまった迷宮病の患者は、決して救うことができない、というのが現在の常識だった。いや、救うべきではない、というのが世界的な方針なのかもしれない。

・発病してから一定時間以内に発病少女を殺さなければ、その区画は永遠に迷宮になっ

てしまう。だから一秒でも早く殺すべきだ。

・永久迷宮化してしまったらもう、その迷宮の中の少女は永久に見つけ出すことができない。迷宮と化してしまった区画や人間は、二度ともとは戻らない。だから一秒でも早く、少女を殺すべきだ。

これが世界の常識。

つまり発病少女はもう、助けることができないのだ。そもそも、助けるための研究自体が行われていない。

だから太閤製薬でも主に、少女を一秒でも早く殺すことができるような《薬》や《魔法》の開発を行っているはずだった。

妹を救いたい——なんて馬鹿げたガキの戯言を抱えている僕とは、真逆の思想。

だからその研究室の室長をしている従姉妹とは話が合うはずがない。

弥生が言う。

「お兄様」

「僕はおまえの兄じゃない」

「私は兄のように慕っています」

「迷惑だ」

「お兄様」

「うるさいなあ」

「お兄様は世界を巡って……世界中の迷宮病研究の機関を巡って、迷宮病について調べてこられたのですね？ 咲を救出するために、かなり危険なこととしていた、と、聞きました」

「……………」

「それで他国では、どうでした？ 発病少女を治療する方法が——」

僕は遮って言った。

「なんだ結局スパイかよ。僕が持つてる情報を奪ってこいって、太閤製薬に命じられたか？」

聞くと、弥生は必死に首を振った。

「そ、そんなんじゃありません。私は純粹にお兄様のお役に立ちたいと」

「嘘だね」

「本当です。私は……昔からずっと、お兄様のことが……」

とそこで、なぜか弥生は困ったように口をつぐんで、言葉を止める。

「なんだよ」

僕が聞くとまた、弥生は首を振る。

「なんでもありません。ですが、これだけは信じてください……」

遮って僕は言った。

「信じないね。僕は自分と金以外、なにも信じない」

「あ……」

「話はそれだけか？　じゃあ帰るよ」

「待って……」

「待たない。おまえも僕と付き合ってるのがバレたら地位を失うぞ。二度と僕に声をかけるな」

瞬間、弥生が瞳を大きく見開き、

「あ、あ、まさかその邪険な態度は、私のことを氣遣……」

だがやはり、僕は遮る。

「違うよ勘違い馬鹿。純粹におまえが嫌いなだけだ」

「嘘です！」

「それに全部どうでもいい。おまえとは二度と会わないから」

「お兄様！　お兄様の住む場所は、私がご用意をさせていただきます。ですから、一緒に……私と一緒に、二人で咲のことや、これからのことを考えていきま……」

僕は振り返って、言った。

「ちよつとうぜえよ、おまえ」

弥生はびくつと震える。

そしてそれで、終わりだった。

泣きそうな顔の従姉妹。

へらへら笑う僕。

「じゃあね、弥生。会えてよかったよ」

手をひらひら振って、僕はその場をあとにした。

つづきは11月20日発売のファンタジア文庫で！

© Takaya Kagami, Yuki Kato (ARC SYSTEM WORKS) 2013